

## 神奈川県における乳幼児の突然死に関する 疫学的研究 (分担研究：乳幼児の突然死に関する研究)

坂上正道

渡辺 登、門井伸暁

**要約：**神奈川県における乳幼児の突然死、特に乳幼児突然死症候群の実態を明らかにするために、平成2年度に引続き平成3年1月から12月末までの1年間のアンケート調査を実施した。アンケート調査の回収率は54.8%であり、2次アンケートの結果突然死症例38名の回答を得た。

このうち広義のSIDSは25名(狭義のSIDS20名)であり、出生1000に対する本症の発生頻度は0.31(狭義のSIDS0.25)であった。本症の発症に性差はなく、発症年齢は2ヶ月にピークがあり6ヶ月以内に80%が発症していた。発症時期は3月が最多であったが、季節性は認めなかった。発症場所は自宅が76%と圧倒的に多かった。発症時刻は午前11時が最多であったが、一定の傾向はなかった。発症状況は睡眠中が80%と圧倒的に多く、睡眠場所はベッドが多く、体位はうつ伏せ、仰向けともほぼ同数であり、一人寝が多かった。

2年間にわたる疫学調査の結果、神奈川県におけるSIDSの発生頻度は出生1000に対して0.3前後であることが判明し、本症が小児医療における重要な疾患であることが再認識された。

**見出し語：**乳幼児突然死、SID、乳幼児突然死症候群、SIDS、アンケート調査

### 目的

神奈川県における乳幼児の突然死(SID)、特に乳幼児突然死症候群(SIDS)の発生頻度、発症年齢、発症時期、発症時刻、発症状況などの特徴を明らかにすること。

### 方法

平成2年度同様、県医師会、県産科婦人科医会、県小児科医会、県衛生部、各大学医学部小児科学教室などの協力を得てアンケート調査を実施した。アンケート調査は1次と2次に分けて行った。アンケート期間は平成3年1月から12月末までの1年間とした。1次アンケート調査は、官製葉書を用いて2才未満の乳幼児の突然死症例の経験の有

無を、平成3年6月、10月及び平成4年1月の3回に渡って調査した。1次アンケート対象医療機関は、小児科、産婦人科、内科、外科、無科を標榜の医院・病院・診療所、休日急患診療所、救命救急センターなどとした。1次アンケート調査で経験ありの回答を頂いた医療機関及び県下各大学医学部法医学教室に対して2次アンケート調査を実施した。2次アンケート調査の内容は症例の氏名、性別、生年月日、死亡年月日及び時刻、異常発見の場所・時刻・状態、睡眠中の場合は寝方、診察時の状態・経過、診断名、剖検の有無、剖検主要所見、新生児歴などとした。

北里大学病院小児科

## 結果

1次アンケート回収率は、1回目55.8%（返信1715/往信3073）、2回目55.6%（1700/3059）、3回目53.1%（1609/3028）であり、1年間の合計では54.8%（5022/9160）であった。1次アンケートの結果、突然死症例26名の回答を得た。これらの症例及び各大学法医学教室に対する2次アンケート調査の結果、法医学教室からも26名の突然死症例の回答が得られたが、1次アンケートにおける旧症例、誤症例、誤回答、及び医療機関と法医学教室の重複症例（6名）などを除くと、最終的に有効な回答を得られたのは突然死症例38名であった。

乳幼児突然死症例（SID）38名について詳細を検討した。性差は男児20名（52.6%）、女児18名（47.4%）と特に認められなかった。発症年齢は図1に示すように6ヶ月以内の乳児に好発していた。発症時期は春と夏にやや多いが一定の傾向はなかった。発症（発見）場所は自宅25名（65.8%）、病院医院10名（26.3%）、保育所1名（2.6%）などと自宅が多かったが、病院医院でもかなり発症していた。発症（発見）時刻は午前中にやや多いが一定の傾向はなかった。発症（発見）状況は睡眠中25名（65.8%）、覚醒中、起床直後で3名（7.9%）、その他不明10名（26.3%）と睡眠中が多かった。診断名は図2に示すように乳幼児突然死症候群（SIDS）が25名（65.8%）と圧倒的に多かった。剖検率は76.3%（有り29名）と非常に高かった。新生児歴は過半数の症例で不明のために十分な検討ができなかった。

広義のSIDS25名（このうち20名は剖検にて診断された狭義のSIDSである；剖検率80%）につ

いて詳細を検討した。性差は男児13名（52%）、女児12名（48%）と特に認められなかった。発症年齢は図3に示すように2ヶ月にピークが認められ、25名中20名（80%）は6ヶ月以内の乳児に好発していた。発症時期は図4に示すように3月が最多であったが、特に季節性は認められなかった。発症場所は図5に示すように自宅19名（76%）、病院医院5名（20%）、その他1名（4%）と自宅が圧倒的に多かったが、病院医院でもかなり認められた。発症時刻は図6に示すように午前11時が最多であったが、一定の傾向はなかった。発症状況は図7に示すように睡眠中が20名（80%）と圧倒的に多かった。睡眠中の20名について寝方を検討すると、図8に示すように場所はベッドが多く、図9に示すように体位はうつ伏せ、仰向けともほぼ同数であり、図10に示すように一人寝が多かった。新生児歴は不明な症例が多く十分に検討できなかった。

## 考察

平成2年度の調査では乳幼児突然死症例（SID）39名であり、このうち広義のSIDSは27名（狭義のSIDS17名）であり本症の出生1000に対する発生頻度は0.34（狭義のSIDS0.21）であった<sup>1)</sup>。今年度は現時点で平成3年度の出生数が不明なために平成2年度の出生数79439人を分母にとると、神奈川県における広義のSIDSの発生頻度は0.31であり、狭義のSIDSは0.25であった。今回のアンケート調査も回収率が54.8%と高く、2次アンケートにより症例の詳細が検討できたことに加え、SID症例の剖検率が76.3%と高いことから実態を正確に反映した信頼し得る数字であると思われた。

広義のSIDSは性差は認められなかった。発症

年齢は2ヶ月にピークがあり6ヶ月以内に80%が発症していた。発症時期には一定の傾向はなかった。発症場所は自宅が76%と圧倒的に多かった。発症時刻は午前11時にやや多かったが一定の傾向はなかった。発症状況は睡眠中が80%と圧倒的に多く、睡眠場所はベッドが多く、体位はうつ伏せ、仰向けともほぼ同数であり、一人寝が多かった。新生児歴は不明な症例が多く十分に検討できなかった。以上の疫学的傾向は昨年度同様従来の報告とほぼ一致しており、発症年齢が6ヶ月以内に多いこと、睡眠中に発症したと思われる症例が多いことなどが特徴であった。

以上平成2年、3年の2年間にわたるアンケートによる疫学調査で神奈川県におけるSIDSの実態が正確に判明した。この実態を踏まえて本症の小児医療における重要性を再認識し、本症の予防対策と本格的に取り組む必要があると思われた。

文献

- 1) 坂上正道、他. : 乳幼児突然死に関する研究、平成2年度研究報告書、1991

図2 SIDS 診断名

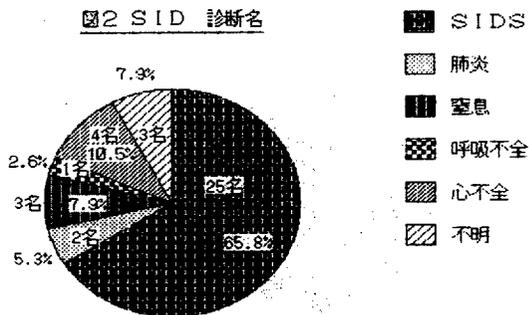


図3 SIDS 発症年齢

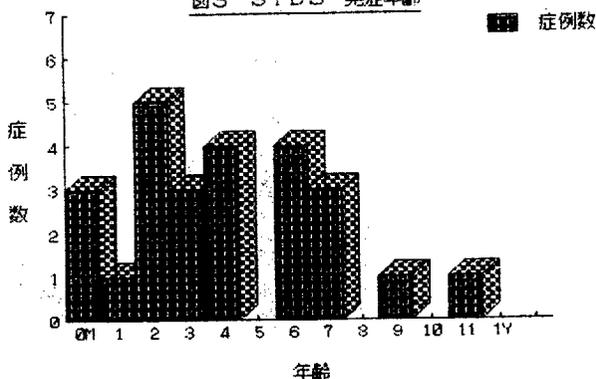


図1 SIDS 発症年齢

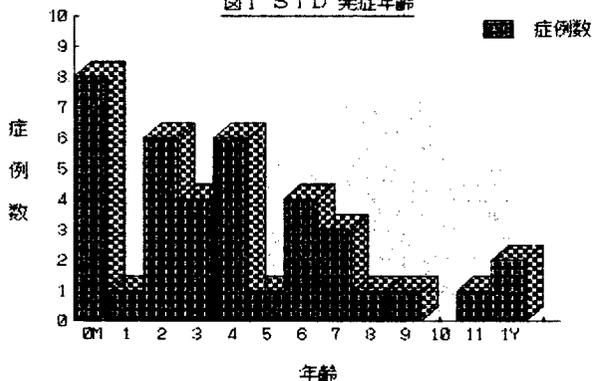


図4 SIDS 発症時期

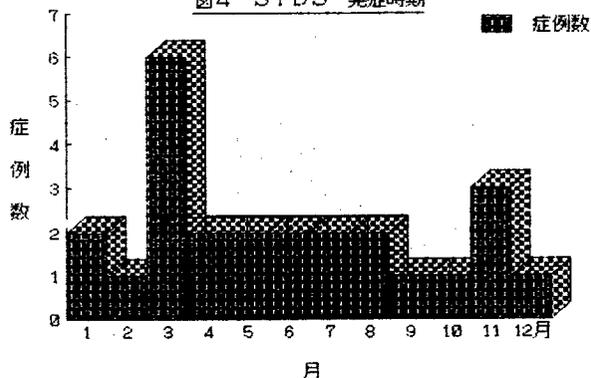
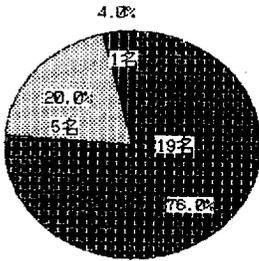
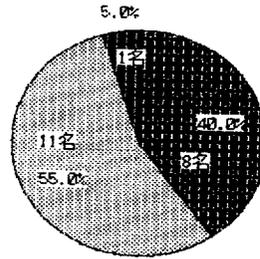


図5 SIDS 発症場所



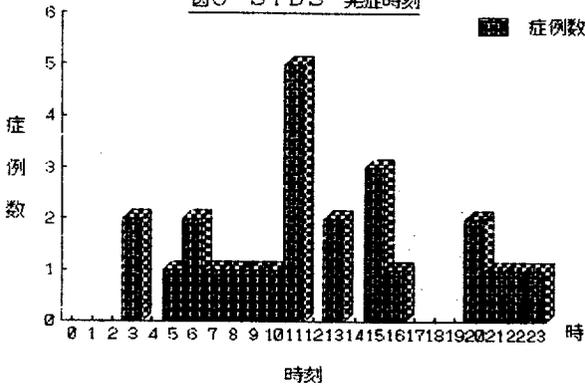
- 自宅
- 病院医院
- その他

図8 SIDS 睡眠場所



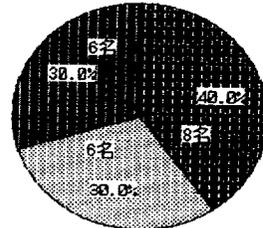
- 布団
- ベッド
- 不明

図6 SIDS 発症時刻



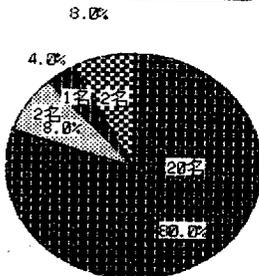
- 症例数

図9 SIDS 睡眠時体位



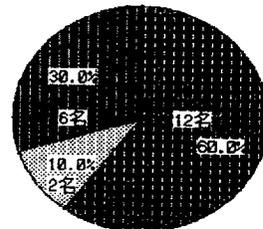
- うつ伏せ
- あお向け
- 不明

図7 SIDS 発症状況



- 睡眠中
- 覚醒中
- その他
- 不明

図10 SIDS 睡眠状態

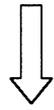


- 一人寝
- 添い寝
- 不明



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:神奈川県における乳幼児の突然死、特に乳幼児突然死症候群の実態を明らかにするために、平成2年度に引続き平成3年1月から12月末までの1年間のアンケート調査を実施した。アンケート調査の回収率は54.8%であり、2次アンケートの結果突然死症例38名の回答を得た。

このうち広義のSIDSは25名(狭義のSIDS20名)であり、出生1000に対する本症の発生頻度は0.31(狭義のSIDS0.25)であった。本症の発症に性差はなく、発症年齢は2ヶ月にピークがあり6ヶ月以内に80%が発症していた。発症時期は3月が最多であったが、季節性は認めなかった。発症場所は自宅が76%と圧倒的に多かった。発症時刻は午前11時が最多であったが、一定の傾向はなかった。発症状況は睡眠中が80%と圧倒的に多く、睡眠場所はベッドが多く、体位はうつ伏せ、仰向けともほぼ同数であり、一人寝が多かった。

2年間にわたる疫学調査の結果、神奈川県におけるSIDSの発生頻度は出生1000に対して0.3前後であることが判明し、本症が小児医療における重要な疾患であることが再認識された。